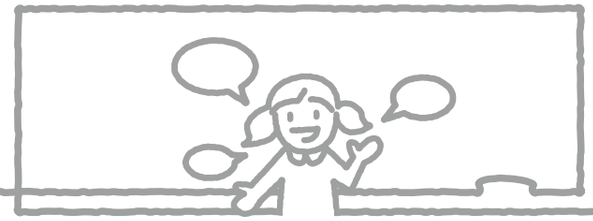
継続したい日常学習



音読、漢字学習、読書、スピーチ、短い文章を折に触れて書くこと、言葉を集めることなど、知識や技能の定着のために、日頃から継続的に子どもたちに取り組ませておきたい学習があります。

具体的にどのような時間を使って、どのように取り組ませるとよいのか、稲田八穂先生のご提言と四人の先生方の事例から探っていきます。

提言

日頃から取り組ませておきたい学習

筑紫女学園大学 准教授
稲田八穂

日常学習をもっと有効に活用しましょう

日常学習は多くの学級で行われている活動です。しかし、年度当初は子どもたちと話し合って決めた意欲的な活動でも、忙しさに追われて子どもまかせになったり、形骸化したりしていることはないでしょうか。言語活動の充実、配当時間の減少など、国語科の指導に頭を悩ませることがあるなか、この日常学習を有効に活用することを提案します。一日五分の活動は、二週間では一単位時間分になります。数分でも意識的に継続すれば大きな力になるはずです。

日常学習が行われる時間としては、朝の会、帰りの会、あるいは一時間目の前の特設時間、任意の時間などが挙げられます。内容は、音読・暗唱、一分間スピーチ、読書、読み聞かせ、漢字の練習、短作文などさまざまです。「継続は力」です。これらを国語科の指導に位置づけ、教科書教材や学習と関連させて有効に指導することでより確かな力になると考えます。

音読や暗唱を通して

学校を訪問すると、あちこちの学級から音読の声が聞こえてきます。音読・暗唱は、だれでも参加できるため、最も継続にふさわしい活動といえます。教科書二年上「ふきのとう」では聞き手を意識した音読の方法、三年上「いつも気をつけよう」では姿勢、発音・発声、四年上「いつも気をつけよう」では抑揚、強調、速さ、間（ま）に気をつけて音読することが示されています。これらを日常の音読活動の指導のポイントとして取り上げると、活用につながります。

現在学習中の教材文にとどまらず、各学年の付録にある文学的な文章を使うのもよいでしょう。「聞いて楽しもう」の系列では民話や神話が、三年下の付録には「百人一首」が掲載されています。子ども自らが読み方を工夫できるのではないでしょうか。また、独自の音読集を作成することもお勧めです。先生が作ってくれた音読集なら、子どもたちにも愛着が生まれます。

福岡県北九州市では、全児童に音読・暗唱ブック「ひまわり」を配布しています。発声や読み方が分かりやすく説明されており、自分一人でも取り組めるため、家庭でも音読をする子の姿が見られました。古文や漢詩なども取り入れられているので、国語科の学習でも活用できます。「ひまわり」を活用した音読・暗唱により、子どもたちの言葉の力が各領域において向上したという研究成果も報告されています（元北九州市教育センター研究員・岩倉智子教諭による）。

読み方としては、「一斉読み」だけでなく、「センテンス読み」「二人読み」「役割読み」などを取り入れると、新鮮な気持ちで音読・暗唱ができます。共同して読み合うことで、コミュニケーション力も高まるでしょう。

スピーチ活動を通して

スピーチは、音読・暗唱と並び、多く取り組まれている活動の一つです。学級経営という目的のもと、行っている方も多いでしょう。

「話す・聞く」力は教科書教材だけではなかなか身につきません。習得も活用も短時間では難しいからです。ここに、日常学習の果たす役割があります。スピーチ活動については、教科書三年上「つづけてみよう」に話題や話し方が示されているので、学年初めに指導して継続すると効果的です。四年上「つづけてみよう」の「ちょっと相談」も、関心をもって取り組める話題です。もちろん、教科書教材の「話すこと・聞くこと」の指導と関連させることも大切です。教科書教材の導入、学習後の習得・活用の場として意識的に指導しましょう。

四年上「物事や考えをつなぐ言葉」を活用した「サイコロトーク」という活動も考えられます。自分のスピーチの後、接続詞の書かれたサイコロを振り、出た接続詞を使ってスピーチを続けます。自分があらかじめ考えていた話とは違う終わり方になるおもしろさがあり、その場で考える力も身につきます。

「読みあい」の様子。朝の 10 分間読書や授業のちょっとした空き時間を活用して取り組むことができる。

読書を通して

今や「十分間読書」は全国的に広がりました。自分の机の横に読みたい本を提げている姿を見かけることも珍しくありません。読書が日常化してきていることの表れでしょう。

教科書二～四年下巻および五、六年にある「この本、読もう―本は友達」を読書に有効に活用することができます。子どもたちはまるで図書館や書店にいるかのようにこのページを見つめ、短い紹介文を読んで心ひかれる本を手にしようと思います。これらの本を学校図書館に数冊そろえれば、書棚から取り出すように自分の読みたい本を主体的に選ぶことができるでしょう。ブックリストを作り、読書記録を残すのもよいかもしれません。六年「続けてみよう」の「読書日記」と関連させることもできます。国語科の学習での並行読書をこの時間に充てることも考えたいものです。

異学年どうしで読書をする機会も増えています。上級生が下級生に読み聞かせをすることでほのぼのとした交流も生まれます。ぜひ、下級生にも読む経験をさせましょう。いつも読んでもらっている側から、自分も読もうという意欲が生まれます。選んだ本を持ち寄り、二人で対話しながら読むという、児童文学作家・村中李衣（りえ）氏の提唱する「読みあい」を取り入れてみるのもよいでしょう。自分が本を選んだ理由や好きな場面について対話しながら読むことができます。読書を通して友達とつながることができるはずです。

また、教師や地域の方による読み聞かせも増えてきました。この時間を使って、子どもたちの思いや言葉を拓（ひら）くために、「シェアリングタイム」を設けることも考えられます。読み聞かせてもらった後のお互いの思いをシェア（共有）するのです。国語の時間には、なかなか自由な思いを言えない子どもも、学習ではない気楽さから自分の感想が話せます。個の思いをみんなで認め、読むことの自由を実感できます。

なかには、集中して聞けない子もいるかもしれません。そんな場合には、アニマシオン的な要素のあるクイズを取り入れるのもよいでしょう。国語で「じんぶつ」について学習した後、読み聞かせの本に登場する人物の持ち物クイズをする、「あらすじ」を学習した後、バラバラにしたキーセンテンスを並べ替えるなどさまざまに工夫できます。楽しい活動を通して、読みの学習で学んだことを習得させたいものです。

出た目に書かれた接続詞を使って，適切なつながり方になるように，続くスピーチの内容を考える。

書くことを通して

国語を苦手とする子どもの多くは作文が嫌いだと答えます。理由はさまざまでしょうが、まず書き慣れていないことが挙げられます。国語の時間に書くものはかなりの分量です。苦手な子にとってはそれがネックになっているのではないでしょうか。短作文は、短い文章で書き慣れることができるため、有効な手立てとなります。教科書各学年「季節の言葉」を使って短作文を書いたり、六年「続けてみよう」の「読書日記」や「今日の出来事」を継続したりすることも可能です。

また、「今日は取材だけしてみよう」として、思いつくことをマッピングしたり、「主題を書こう」として、言いたいことだけを書いたりするといったように、「書くこと」の学習過程に分けて取り組むのも一つの方法です。

一人では書けない子への手立てとしては、筆談で対話をする「鉛筆対談」が挙げられます。自分では思い浮かばないことも、人から尋ねられると答えようとするものです。それがつながっていくと、考えの筋道もできます。

＊　＊　＊

いくつか事例を挙げながら、日常学習を有効に活用することについて述べました。大切なことは、「どんな力をつけようとしているのか」という目的をもって取り組むことです。そしてその力が生きる教材を見極め、位置づけていくことです。単一の活動や教材で子どもたちの言葉の力は高められるものではありません。らせん的に繰り返し指導していくことが大切なのです。

稲田八穂（いなだやほ）

京都市生まれ。筑紫女学園大学人間科学部准教授。京都市・北九州市内の公立小学校教諭を経て，現職。主な共著書に『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造３　小学校低学年編』（東洋館出版社）などがある。